



第1章

草創期

明治30年(1897)
昭和2年(1927)

- ▼明治30年(1897)
 - 4月 私立岩手病院開設。医学講習所、私立岩手産婆看護婦養成所併設
- ▼明治33年(1900)
 - 2月 医学講習所を盛岡医会堂(盛岡市六日町)に移設
- ▼明治34年(1901)
 - 5月 私立岩手医学校設立認可
- ▼明治42年(1909)
 - 11月 私立岩手産婆学校設置、私立岩手看護婦養成所と分離
- ▼明治45年(1912)
 - 4月 岩手看護婦養成所と岩手産婆学校を私立岩手産婆看護婦学校に改称
- ▼大正11年(1922)
 - 3月 私立岩手医学校閉校
- ▼大正15年(1926)
 - 3月 岩手産婆看護婦学校、文部省の指定認可
- 10月 岩手病院診療棟(現1号館)竣工

草創期

明治30年(1897)～昭和2年(1927)

岩手県立図書館に『岩手病院／岩手医学校／岩手看護婦養成所／岩手産婆学校／及其他ノ事業十年間経営概要報告』という資料が収蔵されている。著者は、本学の創始者三田俊次郎と明治年間に岩手病院副院長だった三浦直道である。縦22.4cm、横15.0cm、43ページからなる小冊子。明治40年(1907)に岩手県に提出された岩手病院及び岩手医学校・同看護婦養成所・同産婆学校の10年間の経営概要報告書だ。この資料により、本学が、明治30年(1897)に地域の健康を担う医療チーム創出のためにはじまったことがわかる。

内容は病院及び学校の経営事業の概要、敷地・建物、病院組織、患者数や往診数・治療日数・学生数・収支決算などの各種データ、学校での講義内容・医学研究活動・医療関係出版物の紹介など多岐にわたっており、病院と学校の全体像を正確に把握できる。客観的な資料の行間には、江戸から明治へという時代の転換期に、岩手の医療基盤を確立しようとした俊次郎のひたむきな情熱がにじむ。

少しさかのぼって明治のはじめに目を転じてみよう。明治9年(1876)年、県立岩手病院が開業し県立医学講習所が併設された。しかし、初代文部大臣・森有^{もりありのり}礼が断行した教育改革により、官立の医学校5校による医学教育体系が構築され、明治20年(1887)、公立医学校の運営費に地方税を支給できないという勅令が出され、財政難から各地の公立医学校は相次いで閉校となる。岩手県の医学講習所も明治21年(1888)に廃止され、岩手病院は稲野権三郎により稲野病院として運営されていた

たが、経営に問題があり病院は県に返却される。県は病院を廃止し、その敷地に県立獣医学校を移転する計画を立てた。俊次郎は関係各方面に働きかけながら病院の建物と敷地の借用を請願し、陳情を繰り返したが、県の意向は変わらなかった。盛岡市に陳情するも、県の意向には抗えないという。内務省から出向していた岩手県警部長・樋脇^{ひわき}盛苗^{もりなえ}が、県都盛岡には総合病院が必要であることを力説、明治29年(1896)、県は俊次郎の請願の受け入れを決めた。翌明治30年(1897)、私立岩手病院が開院し、医学講習所・産婆看護婦養成所が併設された。その後明治34年(1901)に病院の敷地・建物が県から払い下げられることが決まり、医学講習所が私立岩手医学校として認可される。払下げ総額は8,246円。

俊次郎は、医学への情熱と、医療人育成の理想を掲げて、病院と医学校の経営に乗り出した。しかし、明治39年(1906)、医師法が公布され、医学専門学校卒業者にのみ医術開業試験の受験資格が与えられることになる。私立岩手医学校は、医学専門学校への昇格を断念。やむなく明治45年(1912)にいったん閉校となる。その間の事情を概観したのが上述の経営概要報告書である。

当時の新聞記事によると俊次郎は仙台医学専門学校を岩手県に移管するために奔走したり、国への陳情を繰り返したりして、医学教育の道をあきらめていなかったことがわかる。一方、私立岩手病院は、大正15年(1926)に盛岡出身の建築家・葛西萬司設計の新病院を竣工し、着実に地域医療の拠点としての地歩を固めていく。

「私立岩手病院」の誕生



病院正面



病棟と中庭

明治30年（1897）4月20日、三田俊次郎は岩手県から元県立岩手病院の敷地・建物を借り受け、私立岩手病院を開き、同時に医学講習所と私立岩手産婆看護婦養成所を置いた。院主は三田俊次郎、院長には杉立義郎、副院長には俊次郎の義弟・三浦直道を配した。

明治9年（1876）に建てられた病院の建物は、総ヒノキ造り2階建て、みごとな中庭も備えていたという。病室は特等8室、西病棟17室、北病棟8室、東病棟12室、伝染病棟4室など、入院定員は100名である。

病院組織は医局・薬局・事務局の3部に分かれており、医局には医学士、大学専科卒業生など24名が在籍し医務に当たった。

明治34年（1901）12月、県から借り受けていた病院

の敷地・建物を8,246円余で買い受け、同年に私立岩手医学校の設立が認可される。一時学生40～50名が在籍したが、その後、国の医育政策が大きく変わり、明治45年（1912）、岩手医学校はいったん閉じられる。

岩手病院は開院当初から医療に主軸を置きつつ、医者・産婆・看護婦によるチーム医療、無料診療所である「施療部」設置や医事衛生雑誌の発行等によるヘルス・プロモーション活動、医学図書室設置によるリベラル・アーツを重要視する全人的医療にも重点を置いていた。日露戦争開戦後は傷病兵の治療を目的とした救護団を編成するなど、時局に応じた診療を行った。

●開院式
岩手病院に於ては本月二十日
を以て盛大なる開院式を行ふ由にて招待せし
人々は縣廳及び各役所高等官、縣會、市會、郡
會各議員、參事會、外來商有志者、各警察署
長、各町村長、開業醫等都合五百名以上にして
開院の式は病院内に於て施行し而して宴會は
當日晴雨の都合によりて秀清閣若くは杜陵館
にて催すとの事

明治30年（1897）6月
20日開催の岩手病院開
院式を取り上げた『岩手
日報』の記事



盛岡医学講習所跡（昭和50年（1975）前後に撮影か）。盛岡市六日町（現・下ノ橋町）にあった盛岡医会堂の中に、明治33年（1900）2月、私立岩手医学校の前身・医学講習所移設

創設時の主なメンバー

明治30年(1897)岩手病院創設時、院主・三田俊次郎は34歳、ドイツ留学から帰国したばかりの院長・杉立義郎は29歳、仙台で医学を学んだ副院長・三浦直道は27歳であった。



院主 **三田 俊次郎**

文久3年(1863)～昭和17年(1942)
眼科医／岩手県立医学校卒業、東京帝国
大学医科大学選科修了

院主の傍ら、三田眼科医院で眼科医として、
不衛生な環境から東北地方に蔓延していたト
ラホーム等の眼病治療と廃絶に腐心した。



院長 **杉立 義郎**

明治元年(1868)～昭和8年(1933)
外科医／兵庫県出身。東京帝国大
学医科大学卒業

ドイツ留学帰国後、愛知医学専門学
校教授の職が決まっていたが、月給
200円という破格の待遇で初代院長
に招聘。小学校教員の初任給が8円
だった時代である。着任してすぐジフ
テリア治療のため、東北初の気管切
開手術を行った。



副院長 **三浦 直道**

明治3年(1870)～昭和23年(1948)
産婦人科医／県立岩手医学校、第
二高等学校医学部(現・東北大学
医学部)卒業

三田俊次郎義弟。三浦自祐長男。岩手
県恩賜救護技師(無医村派遣医師)
を勤めたのち、岩手病院副院長。その
後岩手県衛生課技師。本学附属病院
名婦長・今野八重女氏の妹・伊藤シク
メ氏が看護婦として直道に同道しなが
ら、県内各地の診療にあたった。



内科医 **内城 隆徳** うちじょう りゅうとく 明治10年(1877)～昭和25年(1950)

明治33年(1900)、第二高等学校医学部卒業後、三田俊次郎の招きで岩手病
院の医員に採用。医学校講師を兼務しながら明治37年(1904)まで在籍。退職
後、紫波町日詰で開業し紫波郡医師会長・町会議員を務めた。本学の校歌の作
詞者で仙台二高の英語教師だった土井晩翠とも親交があった。孫の内城弘隆氏
が平成13年(2001)に出版した『盛岡藩郡山御役医 どうこ医者物語』に、隆徳の
足跡が詳しい。

病院創設の陰の功労者

岩手県警部長 **樋脇 盛苗** ひわき もりなえ

明治26年(1893)3月～30年(1897)4月、岩手県警部長として内務省から盛岡に出向。旧県立岩手
病院の経営破綻の顛末と三田俊次郎の奔走を知り、県が病院跡地を獣医学校敷地に転用することを
決議した県議会決定を覆し、県立岩手病院の建物と敷地を私立岩手病院として再スタートさせる道を
拓いた。病院建設や経営に関してもさまざまな助言を行い、開院前に三重に転出した。本学創立の立
役者のひとりである。



一橋大学附属図書館所蔵
『国光生命保険史』より

「私立岩手産婆看護婦養成所」併設

明治30年（1897）、岩手病院と医学講習所の開設と併せて私立岩手産婆看護婦養成所開設。看護婦養成は、学費を与えての給費養成からスタートした。看護婦試験制度が設けられ、専門教育に加え教養科目を充実させるに至り学納金を徴収するようになる。産婆養成は、明治34年（1901）、私立岩手産婆学校として独立し専門職としての教育が行われた。（のちに明治42年（1909）、私立岩手産婆看護婦学校と改称）

職能教育に限定することなく、「裁縫」「料理」「作

法」「茶ノ湯」「遊戯体操」の科目を開設し、バランスのとれた人格を陶冶していた。『^{十年間}経営概要報告書』によると「学識ヲ進メ品性ヲ高潔ナラシメテ」「穩健ナル作業ヲナサシムル素養」を身につけるための学習会「一和会」を毎月開催したり、キリスト教または仏教の宗教講座を毎月1、2回開講したりして、全人的医療人となるための倫理教育活動も充実していた。

開設より10年間で看護婦81名、産婆102名の有資格者を送り出し、岩手の医療事情を改善する。



大正元年（1912）頃の産婆看護婦学校の卒業写真。まだ日本髪が普通だった時代



昭和2年（1927）頃の卒業写真。看護婦は制帽白衣、産婆は黒紋付きに袴の正装で式に臨んだ

開院当時の職員録に記された職員たち



初代産婆兼看護婦長 西海枝 スク
着任／明治30年（1897）4月



調剤係 阿部 七太郎
着任／明治33年（1900）8月



書記 田中館 忠雄
着任／明治30年（1897）7月

医学教育の潮流

幕末から明治へ

盛岡藩



天正18年(1590)、南部信直^{のぶなお}が豊臣秀吉から南部内7郡を安堵されて盛岡藩を興す。
初代・信直から利恭^{としゆき}まで16代にわたって藩を治めた。
明治維新後の廃藩置県により、盛岡県を経て岩手県となった。

武芸御稽古所から発展した盛岡藩の教育

藩内では冷害による飢饉や河川の氾濫、大火などの災害が相次ぎ、天然痘の流行などもあり、救世済民の重要性が強く認識されていた。人を救うのは人であるという考え方から教育活動にも力を入れていた。

寛文年間(1661～1673)、盛岡城内新丸に武芸所「御新丸御稽古所」を設けたが、軽輩の出入りは禁じられていたため、元文5年(1740)、城下の八幡町に移転。天明8年(1771)、三戸町(後の日影門外

小路)に「日影門外御稽古所」が新設され、当初は武道のみ、後に文教や医学の講座も追加された。

文化元年(1804)、盛岡藩は幕府より蝦夷地警備を命ぜられ、藩士一丸となって事に当たり、文化5年(1808)、その功績によって10万石から20万石に格上げされた。時の藩主利敬^{としたか}は、存在感を増しつつある藩にふさわしい人材を育てるべく学問を奨励し、文化2年(1805)、日影門外御稽古所で儒学の講義を開始した。

岩手医科大学の源流



みうら じゅう
三浦 自祐

三浦家提供

文政11年(1828)～明治44年(1911)

盛岡藩奥医の八角高遠に師事し、西洋医学を学ぶ。洋学校「日新堂」の創設に参画する一方で、医学私塾「廻生堂」を開く。維新後も県内の近代医療の確立に尽力した。長女利佐は三田俊次郎と結婚し、長男の直道は私立岩手病院の初代副院長を務めた。

國本 恵吉氏の偉業

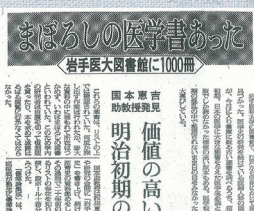
昭和33年(1958)、本学を首席で卒業された國本恵吉氏は、慶應義塾大学医学部大学院で学位取得後、本学産婦人科学講座に帰学。滝沢中央病院長などを歴任しつつ、不妊治療に従事するかたわら、医史学研究も精力的に展開。

同窓会会報『圭陵会会報』や父兄会会報『啐啄』などで、附属図書館に伝来する貴重書を紹介しながら、本学の歴史を丹念に掘り起こされた。それらの玉稿は、著書『岩手の医学通史―探訪と発掘―』(昭和62年<1987>)、『盛岡藩医学教育史』(平成4年<1992>)とともに、岩手医学史の実態を明らかにした緻密な成果である。

とりわけ、『岩手医科大学六十年史』(平成元年<1989>)巻頭の「東北地方医療界における岩手医科大学―その創立の時―」に、本学前史が詳しい。本記念誌作成にあたっては國本氏の著作から多くの御教示を得ることができた。平成21年(2009)、急逝された。



國本 恵吉氏
滝沢中央病院提供



昭和63年(1988)6月11日『朝日新聞』
本学附属図書館に眠っていた江戸から明治にかけての貴重な古医学書1,000冊余りが、國本氏によって発見されたことを報じた『朝日新聞』の記事

文武教育への転換 藩校「明義堂」と「作人館」

天保11年(1840)、日影門外御稽古所が、藩校「明義堂」となった。この藩校開設には藩に招かれた京都の蘭方医・新宮涼庭^{しんぐりょうてい}が深く関わり、その後の人材育成にも大いに貢献した。

明義堂は慶応元年(1865)、「作人館」と改称。作人館には文学教場「修文所」、武芸教場「昭武所」のほか「医学所」も新設され、文・武・医の教育体制が確立した。

維新期の混乱により作人館は休館。明治3年(1870)、廃藩置県^{へいはんちけい}の動きのなか「盛岡県学校」として再開するが、明治5年(1872)、学制発布によりその歴史を閉じる。明治6年(1873)、作人館跡地に「第一番小学校(後の仁王小学校)」が開校。後に、開学間もない岩手医学専門学校は仁王小学校のグラウンドを借りて運動会を行った。



盛岡市立仁王小学校に設けられた「仁王歴史館」と保存資料
盛岡市立仁王小学校所蔵

新しい教育を求めた私学の系譜 洋学校「日新堂」と医学私塾「廻生堂」

藩校「明義堂」「作人館」とは別に、高い志を掲げた人々による新しい教育の場が生まれる。

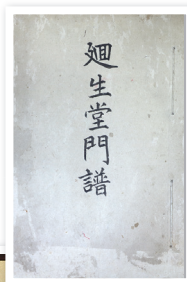
盛岡藩の奥医・八角高遠^{やすみとかとう}は、明義堂で西洋医学について講じたため免職となる。その後の文久3年(1863)、洋学者の大島高任^{おおしまたかとう}らとともに洋学校「日新堂」を開設し、最新の西洋医学と科学の研究・普及に努めた。明治元年(1868)、盛岡藩の戊辰戦争敗退により、わずか5年で廃絶を余儀なくされた。

日新堂の主要メンバーだった三浦自祐が文久年間(1861~1864)に医学私塾「廻生堂」を開き、明治20年代まで続いて多くの英才を世に送り出した。創業者・三田俊次郎は三浦自祐の高弟である。



三浦家が所蔵する「日新堂」扁額。頼復次郎揮毫。慶応2年(1866)4月の日付が記されている

門人名簿
『廻生道門譜』



三浦家に伝来する「廻生堂」扁額。「杏園先生柯亭真士」とある。「杏園」は三浦自祐の号 三浦家所蔵

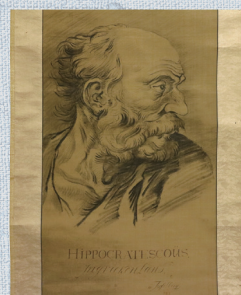
三浦自祐家から盛岡市先人記念館に寄託された 「廻生堂」旧蔵の軸

左は、盛岡藩第14代藩主南部利剛筆「神農」軸。神農は中国古代の皇帝で、農業・医薬・音楽・経済等の祖神として、ヒポクラテス像と並んで、江戸時代後期の医塾に祀られることが多かった。

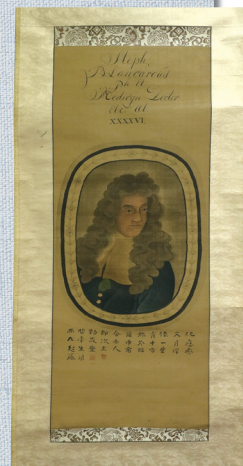
中央と右は、双軸として同一の表装のヒポクラテス像とブランカールト像。ブランカールト(1650-1704)はオランダの医師。植物学者・昆虫学者でもあった。『ブランカールト解体書』(1678年)は『解体新書』の翻訳にあたって参照された。廻生堂では医神ヒポクラテス像とあわせて二対の軸を掲げていたと思われる。



「神農」軸



ヒポクラテス像



ブランカールト像

盛岡市先人記念館所蔵

さまざまな足跡

岩手病院初代院長・外科部長 杉立 義郎

岩手の近代外科の先駆、東北初の気管切開

杉立義郎は明治27年(1894)東京帝国大学医科大学を卒業後、同大ドイツ人教授スクリバのもとで外科を学んだのちドイツに留学。帰国後、私立岩手病院の初代院長として招かれた。

新進気鋭の外科医・杉立の活躍を伝える掛け軸が本学に所蔵されている。「気管切開之図」は、ジフテリアによって気道閉塞をきたし重体となった小児が、杉立の気管切開術によって一命をとりとめた瞬間を描く。患者の容態を観察している杉立義郎、佐藤尚二ら2人の外科医と看護婦、タオルを握りしめてわが子を見守る母親。作者は盛岡在住の日本画

家・葛江月ではないかと推定される(國本恵吉「礎」『啖啄』55号、平成17年(2005)による)。

母が画家に頼んで描かせたこの掛け軸は、手術のお礼として杉立に贈られたが杉立は拝辞。手術の助手を勤めた佐藤尚二に献呈されたのち、佐藤の弟子小田島権五郎氏、杉立の長男・杉立義行氏を経て、杉立家から本学に寄贈された。



「気管切開之図」182cm×93cm
中央が杉立院長、右端に佐藤尚二

岩手病院医師 佐藤 尚二

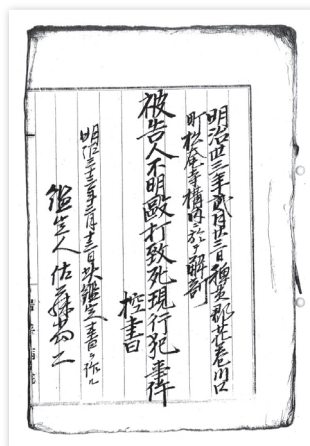
法医学講座に保管されている明治の剖検書の写し

佐藤尚二は明治31年(1898)～明治38年(1905)、岩手病院に勤務した外科医。明治34年(1901)、現職のまま東京帝国大学医学部に内地留学。病理解剖学、臨床外科学の研鑽を積んだ。

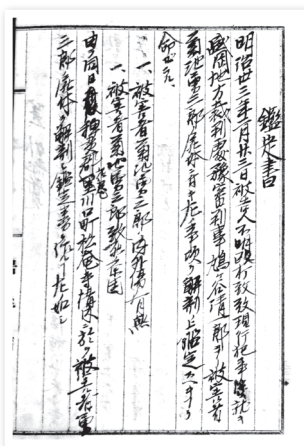
明治33年(1900)2月25日の『岩手日報』に、佐藤尚二が一ノ倉派壮士・菊池勇三郎殴打致死事件の検視を行ったという記事が掲載されている。本学法医学講座にはその剖検書の控えが保管されている。



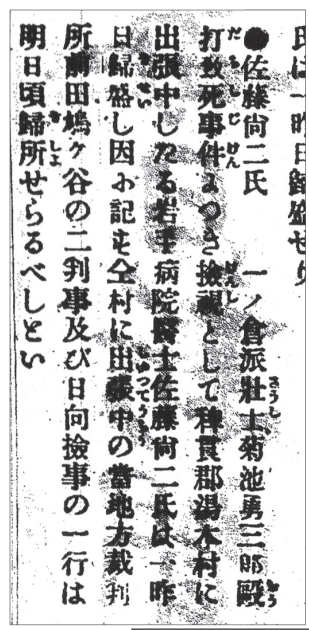
佐藤 尚二
黒澤泰氏提供



殴打事件剖検書控え(本学法医学講座所蔵)



殴打事件剖検書の本文部分



明治33年(1900)2月25日の『岩手日報』の記事

日露戦争と岩手病院

日露戦争

明治37年(1904)2月8日 旅順攻撃

明治38年(1905)9月5日 ポーツマス条約講和

明治37年(1904)2月8日、日露戦争開戦の詔勅が発布されたその日、岩手病院ではただちに病院職員からなる「岩手博愛救護団」を編成する。岩手博愛救護団は天変地異やその他の事変における傷病者を救護する医療チームである。日露戦争の際、同団は前後10回の救護活動を行い、延べ21日間で40名を救護した。岩手病院が支援したのは戦地の兵士だけではなく、出征軍人の後顧の憂いを払拭するよう、残された

家族の健康管理をサポートしたり、遺族の無料診療を行ったりした。

これは岩手病院の被災者支援の迅速な対応と人道的な済民活動の端緒である。以来、長年の堅実な取り組みは、平成23年(2011)の東日本大震災津波発災時に大きな力となり、現在の「いわて災害医療支援ネットワーク」へと引き継がれている。

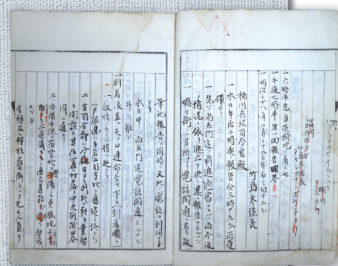
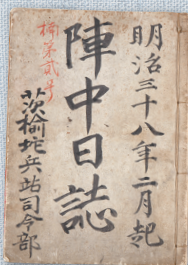


陸軍病院船。従軍医や従軍看護婦を乗せて秋田港から出航した羽後丸が、広島呉港に立ち寄ったときの記念写真



日露戦争に出征する岩手医学校第1期生7名

陣中日誌



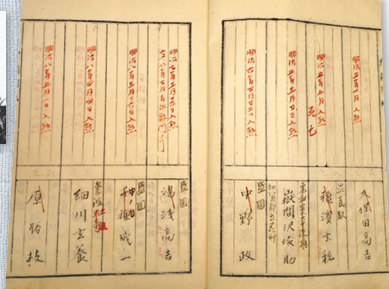
本学法医学講座に保管されている『日露戦争 第八師団陣中日誌』。内容は天候、行軍記録、現地調達物資、食事内容、軍医の活動記録等多岐にわたる。軍内の診療記録のほかに、行軍の途中に立ち寄った村での天然痘の患者の診察記録などの国際協力の記述も見られる。

陸軍軍医・中目成一

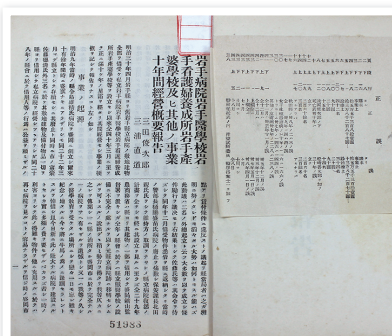


『廻生堂門譜』。「千種」が「中ノ目」に改められている。「明治八年三月十六日入塾」と朱書き

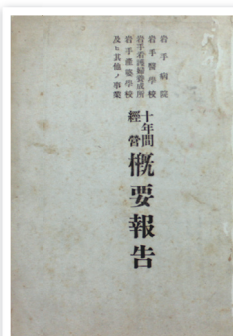
軍医部長として従軍した中目成一は、三浦自祐の医学私塾「廻生堂」の門人で、明治44年(1911)6月に没した自祐の葬儀で、廻生堂門人総代として弔辞を読んだ。また中目は、日露戦争直前に開発された胃腸薬「征露丸」(現・正露丸)を全軍に広めた軍医としても知られている。



十年間 概要報告



巻頭言の対向ページには正誤表貼付



「十年間 概要報告」表紙

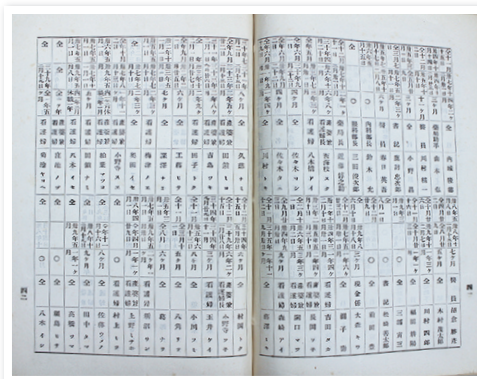
「岩手病院 岩手医学校 岩手看護婦養成所 岩手産婆学校 及ヒ其他ノ事業 十年間 概要報告」

著者：三田俊次郎、三浦直道
発行：明治40年(1907)6月30日(岩手県立図書館所蔵)

医育制度の改革により「私立岩手医学校」を閉じるにあたって、過去10年間の運営の概要を岩手県に報告した冊子(22.4cm×15.0cm、全43ページ)。



職員表。産婦人科部長・三浦直道、院長・外科部長・杉立義郎、医員・佐藤尚二、書記・田中館忠雄、調剤係・阿部七太郎の名が記されている



職員表。医員・内城隆徳、眼科部長・三田俊次郎、産婆兼看護婦長・西海枝スクの名が記されている

『十年間 概要報告』より

冒頭には明治30年(1897)設立当初からの10年間の経営状況を報告する旨が書かれている。

明治三十年四月、岩手県ヨリ旧岩手県立病院ノ敷地建物全部ヲ借受ケ、私立岩手病院、岩手医学校、岩手看護婦養成所、岩手産婆学校等ヲ設立セシ、以来全四十年三月ニ至ツテ、正ニ満十ヶ年ノ星霜ヲ経タリ。其間経営セシ事業ノ梗概ヲ記シテ報告ヲナスコト、左ノ如シ。

『概要報告』の「事業ノ成績」に次のような記述がある。

不幸ニモ、其設備ノ未ダ整ハザルニ際シ、先ヅ専門学校令出テ次テ医師法発布セラレテ、医学生ノ趨向ニ一大変動ヲ起シ、遂ニ我ガ医学校ヲシテ絶対的致命症ニ陥ラシメ、我等ノ希望ヲシテ全ク失敗ニ帰セシメタルハ、独リ我等経営者ノ大恨事タルノミナラズ、蓋シ幾多医学生ノ一大打撃タラズンバアラズ。

新たに発布された専門学校令(明治36年<1903>)と医師法(明治39年<1906>))により、施設・教員定数などの設置基準を満たすことがむずかしく、専門学校昇格への道が閉ざされた。医学校継続が困難になったことに対する経営者としての無念と、医学生への大打撃が痛恨の極みであると呻吟している。俊次郎の胸の埋火が再燃するのは昭和に入ってからのことである。

大正期の岩手病院



内科補強のため 佐藤三千三郎を招聘

大正10年代になると盛岡市内丸地区に岩手病院、赤十字病院、盛岡病院の3つの総合病院が並立。岩手病院は内科が手薄だった。そこで三田俊次郎は当時東京帝国大学法医学教授をしていた三田定則に人選を依頼し、九州帝国大学法医学教授を通じて内科の呉建教授の門弟、佐藤三千三郎を招聘することを決める。

東北の小都市への赴任に気の進まなかった佐藤は、誘いを断る方便として月俸500円という途方もない待遇条件を提示。しかし俊次郎はそれを受け入れ、その熱意にほだされた佐藤は大正13年（1924）4月、内科部長として岩手病院に着任する。当時の杉立院長の月俸は350円だったが、佐藤とのバランスをとるために500円に昇給した。



大正14年（1925）11月頃、佐藤三千三郎の欧州出張を記念して病院中庭で撮影。前列左から4人目が佐藤三千三郎

宮沢 賢治詩碑

2号館玄関脇にある宮沢賢治詩碑「岩手病院」。賢治は大正3年（1914）3月、腸チフスの疑いで岩手病院に入院した



岩手病院と三田俊次郎。IBC岩手放送に保管されていた動画から切り出したショット。大正時代のものか。病院の中から人々が出てきて、三田俊次郎を囲むようにして正面玄関に整列しようとするが10数秒映し出されている

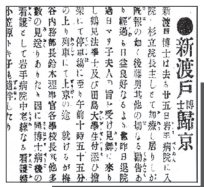
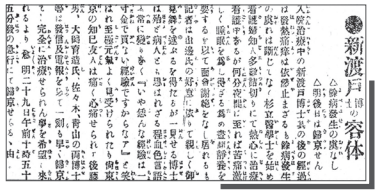
新渡戸 稲造と岩手病院

岩手病院に2度の入院

大正3年(1914)7月24日午後、盛宮自動車会社の路線自動車が下閉伊郡門馬字松草付近の山間道を走行中、崖の7メートル下に転落。岡村から乗車していた新渡戸稲造が軽傷を負った。新渡戸は翌25日夜、人力車で盛岡に移送され岩手病院に入院。発熱、疼痛で一時間面会謝絶となったが、見舞いに訪れた岩手毎日新聞社の記者に、「いや、こんな経験はちょっと金で買えない経験ですからなあ」と笑いながら

話したという。28日に退院、帰京の途についたが、岩手病院から病後の看護のために看護婦・小笠原トキも随伴した。この自動車事故と入院の顛末は、岩手毎日新聞で詳しく伝えられた。岩手県の交通事故第1号である。

また、岩手医学専門学校が開学した昭和3年(1928)6月の2か月後の8月、下北半島訪問中に下痢症状を起こした新渡戸は東北本線で盛岡に降り、再度岩手病院に入院している。



新渡戸稲造の自動車事故遭遇と岩手病院入院を報じる『岩手毎日新聞』の記事。大正3年(1914)7月26日、28日、30日の3回に及ぶ



昭和3年(1928)8月、新渡戸が下北半島訪問中に起こした下痢症状の治療のため入院した際に撮影したもの。新渡戸は前列左側。右が三田俊次郎、後ろが佐藤三千三郎。(['新渡戸稲造研究』第5号、1996、新渡戸基金発行より)

新渡戸 稲造 文久2年(1862)～昭和8年(1933)

たかしようこうじ
盛岡鷹匠小路(現・下ノ橋町)生まれ。盛岡藩士新渡戸十次郎・三男。東京外国語学校、札幌農学校で学ぶ。5歳で父を、18歳で母を亡くす。札幌農学校卒業後、東京大学選科生となる。その後、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学、ドイツのボン大学で、農学・経済学などを学ぶ。

帰国後札幌農学校教授となるが、体調をくずし、再び渡米しカリフォルニア州で療養。その間に日本の伝統的な道德教育についてまとめ、『BUSHIDOU

The Soul of Japan』(明治33年<1900>)を出版。日本文化の紹介

書として世界中で読まれた。後藤新平に誘われ台湾の経済振興政策に参与。サトウキビ栽培の指導をする。京都帝国大学教授、第一高等学校(現・東京大学教養学部)校長、東洋協会植民地専門学校(現・拓殖大学)学監、東京女子大学学長、国際連盟事務次長などを歴任。



岩手病院診療棟完成

新しい時代の新しい建物

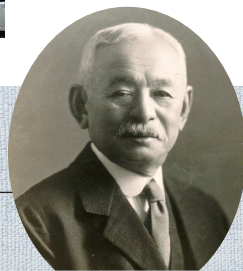
鉄筋コンクリート造の新病棟建築が着工したのは大正14年(1925)8月。三田俊次郎にとって、燃えない建物を造ることが開院以来の最重要課題のひとつだった。1年余りの工事を経て大正15年(1926)10月24日、岩手病院診療棟(現1号館)が完成。3階建て約

321坪余(1,060㎡)、総工費7万円余の堂々たる洋風建築で、10月30日、多数の来賓を招いて落成式が行われた。

設計は盛岡出身の建築家・葛西萬司。師である辰野金吾とともに中央停車場(現・東京駅)などの建設に携わり、盛岡でも数多くの建築物を手がけた。



旧岩手病院診療棟(左)と現在の1号館(右)。写真を見比べると、かつては屋上に鐘楼があったことがわかる。市内唯一の高層建築で、屋上から盛岡駅が見えたという。昭和33年(1958)、4階を増築した際、鐘楼を撤去



葛西 萬司 文久3年(1863)～昭和17年(1942)

かみしゅうこうじ 盛岡上衆小路(現・下ノ橋町)に盛岡藩士・鴨澤舎の次男として出生。盛岡藩士でのちに岩手銀行頭取となる葛西重雄の養子となる。明治23年(1890)、帝国大学工科大学造家学科(現・東京大学工学部建築科)卒業後、日本銀行の建築技師となり、明治36年(1903)、師・辰野金吾と「辰野葛西建築事務所」を開設。会社や学校、ホールなどを次々に手がけ、日本の近代化を牽引した。

大正5年(1916)の辰野の没後、単独事務所を設立。故郷盛岡でも多くの建築物を建てた。重要文化財盛岡銀行本店(現・岩手銀行赤レンガ館)のほか、岩手病院診療棟(現1号館)、岩手医学専門学校第1校舎(後の岩手医科大学3号館、戦時中に取壊し)、同附属医院本館(現2号館)も葛西の設計。



岩手銀行赤レンガ館



盛岡信用金庫本店

葛西萬司が手がけた盛岡の建築物(一部)

建築物	現名称	建設地(現住所)	完成年	現存
盛岡銀行本店	岩手銀行赤レンガ館	紺屋町(中ノ橋通)	明治44年(1911)4月	○
盛岡劇場(初代)		志家(松尾町)	大正2年(1913)9月	×
岩手病院診療棟	岩手医科大学1号館	内丸	大正15年(1926)10月	○
盛岡貯蓄銀行	盛岡信用金庫本店	紺屋町(中ノ橋通)	昭和2年(1927)12月	○
岩手医学専門学校第1校舎	岩手医科大学3号館	内丸	昭和3年(1928)4月	×
岩手医学専門学校附属医院本館	岩手医科大学2号館	内丸	昭和7年(1932)1月	○
盛岡聖堂 (作人館に祀られていた孔子像を奉安する堂)		見石(東中野)	昭和11年(1936)10月	○

(第49回盛岡市先人記念館企画展「葛西萬司」平成25年(2013)7月27日～9月29日パンフレットより)

図書館と蔵書印

病院内に設けられた総合図書館「私立岩手図書館」

医療人にとってリベラル・アーツや学問的な基礎が必要不可欠であるというのが、三田俊次郎の考え方である。明治41年(1908)、東宮(のちの大正天皇)の盛岡訪問を記念して、病院内に「私立岩手図書館」を設置。当時の蔵書の多くは現在もお「巖手醫學文庫」として本学附属図書館に保管されている。県立図書館や市立図書館に先駆けて開設された盛岡で初めての総合図書館であった。



大正12年(1923)～13年(1924)頃の岩手図書館

岩手病院売却未遂事件

大正天皇の即位を記念して、大正3年(1914)、日本赤十字社岩手支部の病院を建てようという議案が県会に出された。内丸にあった盛岡中学(現・盛岡第一高等学校)が上田に移転し、その跡地に日赤を建設するという計画である。盛岡市内の医師団は反対したが、県会では1票差で設立を決定した。

それに伴い岩手病院を日赤に売却する交渉が行われたが、日赤側が提示した売却金(10万円とも5万円ともいわれる)に三田俊次郎が教職員への退職金1万円を上乗せしたため、売却話は白紙撤回となる。

その経緯をうかがわせる『岩手日報』(大正5年(1916)1月5日)の記事がある。「三田俊次郎氏保管の下に岩手病院内の一部に於て経営され居たる盛岡市教育会の図書館は、昨冬赤十字病院問題の突発と同時に三田俊次郎氏より盛岡市に対し辞任を申し出て保管の図書一切を返還すべしとの事」とある。

病院内の図書館は、市立図書館のない時代に盛岡

市教育会から業務委託されていたことがわかる。委託業務を辞し、預かっていた市の図書が返却され、それをもとに市立図書館ができるのは大正5年(1916)5月のことである。



「巖手醫學文庫」所蔵の古医書

蔵書印は語る

「巖手醫學文庫」には盛岡藩の藩校時代に遡る和漢古書延べ3,427冊が収蔵されている。近時、三田俊次郎の師である三浦自祐の御子孫から三浦家伝来の和漢古書も本学に寄贈され、古書点数は4,000冊を超えた。

これらの和漢古書が存在は、医療人育成を担い医学の礎を築いてきた本学にとって、本学の歴史そのものと直結す

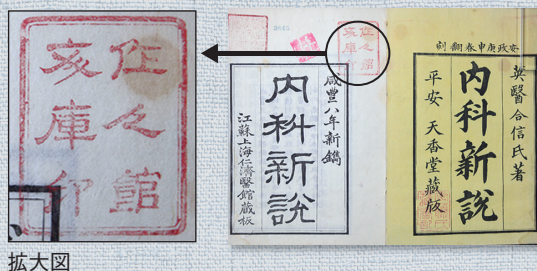
る。蔵書印がその一端を教えてくれる。

巖手醫學文庫の蔵書印は、盛岡藩時代のものと岩手病院時代のものに大別される。

盛岡藩時代のものとして、049ページに記載した「明義堂」「作人館」「廻生堂」の印が捺されたものが数点ずつ伝来する。

「作人館文庫」印

子持ち枠の顔真卿風書体。『内科新説』は安政5年(1858)、イギリス人医師・宣教師のベンジャミン・ホブソンが阿片戦争さなかの中国・マカオでの医療活動時に、中国名「合信」の名で中国語により書いた医学書のひとつ。本学には安政6年(1859)、万屋兵四郎版の上中下3冊のものが3組あるが、作人館文庫印があるのは右の1冊のみ。



拡大図

「廻生堂」印

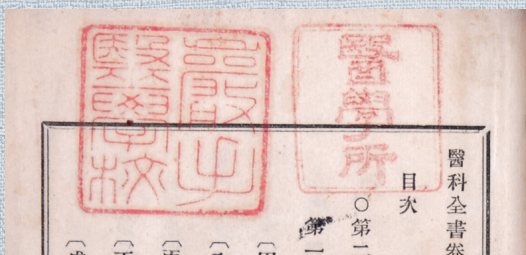
三浦家から本学に寄贈された『^{わあとるやくしやうろん}窓篤兒薬性論』に捺された「廻生堂」印。本書はドイツの薬理学者ブラッグとワートルの共著を長崎出身の蘭方医・林洞海が補訳した薬理学書。安政3年(1856)和泉屋金右衛門版・全21巻



拡大図

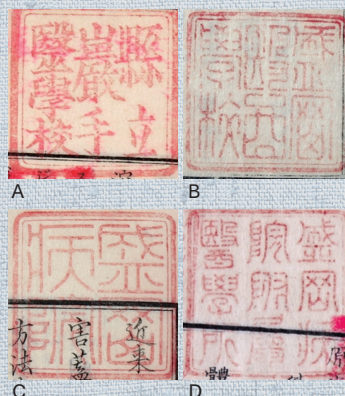
「岩手医学校」印

下の2つは『医科全書』巻之八に捺印されたもの。『医科全書』明治13年(1880)は、東京帝国大学医学部でのミュルレルとホフマンの講義を、山崎元脩が筆記したもの。「岩手医学校」と「医学所」の印が並んでいるが、同時に捺されたものか別の時期に捺されたものかは不明。「医学所」は「盛岡病院附属医学所」のことか。



下の4つの印影は、明治初期の医学校の変遷を物語るもの。「県立」の文字の有無は、不安定な校名の移り変わりを物語る。

また、Bの「盛岡医学校」は明治5年(1872)開設の「公立盛岡医学校」と思われる。史実を伝える貴重な印影である。



- A「県立岩手医学校」
- B「盛岡医学校」
- C「盛岡病院」
- D「盛岡病院附属医学所」

三田 定則が語った 佐藤 尚二の思い出

戦後女性記者の先駆けとして 本学に取材にやってきた黒澤 奏さん

明治 31 年 (1898) ～同 38 年 (1905)、岩手病院に外科医として在職した佐藤尚二の孫にあたる黒澤奏さんは太平洋戦争後、岩手日報に入社。昭和 22 年～23 年頃の新人記者時代に、薬物学の福田鉄雄教授を訪ねたおり、当時学長だった三田定則と偶然出会った。黒澤さんが亡き盟友・佐藤尚二の孫と知ると、思い出話を聞かせてくれたという。



祖父 佐藤 尚二
明治7年(1874)～昭和5年(1930)
明治38年(1905)に岩手病院を退職した後、盛岡市呉服町(現・中ノ橋通)で外科医院を開業。大正14年(1925)、市議会議員当選。昭和4年(1929)再選。



黒澤 奏氏

大正15年(1926)生まれ。昭和22年(1947)岩手日報入社。家庭欄、校閲部を経て、論説委員となる。女性記者も珍しかった時代、女性論説委員は、全国紙に2人いただけだった。社内結婚して第1子出産時に肩たたきにあうが、ベビーシッターを雇いながら仕事を続ける。ほどなく御夫君が二戸への転勤を命じられ、奏さんは退職勧告されるがそれも拒否。その後再び御夫君に異動が告げられたとき、御夫君の方が退社して、家事・育児担当の“主夫”となられた。その後盛岡市役所に勤務。論説委員時代には女性の地位向上のために健筆をふるい、退職後も盛岡市女性懇談会の座長を務めるなど女性の社会進出をサポート。

寄稿

三田定則先生と祖父

祖父の佐藤尚二が亡くなったのは、昭和5年1月26日、私が数え年5歳のときです。父の任地京城から急ぎ盛岡へかけつけたのですが、死に目には間に合わず、幼い私は、遺体をタライの中に坐らせ、体を洗い清めているところだけ目に焼きついています。当時はそういう習慣だったのでしょうか。

葬儀は原敏の次に立派だったと叔父や叔母が話している、私はまさかと思っていましたが、葬儀の列が呉服町の自宅を出て、祇陀寺へ着いても、最後尾の参列者はまだ自宅を出発していなかったとか。

三田定則先生にお目にかかったのは、私が戦後、岩手日報に就職して間もなくのころです。何かの取材で薬学の福田鉄雄先生のお部屋を訪ねた時、偶然、定則先生がフラリと入って来られ、緊張して名刺を差し出すと、先生は「どこの佐藤だ?」と早速戸籍調べです。「呉服町の佐藤です」と申し上げると「尚二つあんの孫だな」とのお言葉。それから昔の話です。「二人が市議会議員をやったんだが、彼は中つて、それでも議会に出て来た。起立!と言われても、なかなか立てないから、立て、立てと横っ腹をつついて立たせたの

黒澤 奏

す」とのこと。そんな可笑しい話を披露して、お帰りになったのです。

私は、盛岡の偉いおじさん方が、ちっとも威張らず、友人のことも決して褒めない方ばかりなのを知っていましたので、笑って聞いていましたが、先生は、孫の顔を見て、友人の最後の姿を思い出されたのでしょうか。定則先生のやさしく飾らぬお人柄は、今も時折り懐かしく思い出しております。

祖父もまた面白い人だったらしく、岩手病院勤務ののち、外科医院を開業していたころ祖母(これも岩手病院の看護婦兼産婆でした)との間に、8人の子供が居り、仕事が終わると、晩酌をやりながら子供らを前に並べて、「こりゃ、うじ虫ども!」と説教をしていたようです。ある時、五男坊の五郎から、「んだば、おど(父)さんはハエすか?」と言われて、ギャフンとなり、それから“うじ虫”はやめたとか、やめなかったとか。

「豚児」とか「荊妻」とかの言葉を使っていた当時のこと。「こりゃ、うじ虫ども」は、私には「可愛い子供たちよ」と解釈出来るのですが、どうでしょうか?